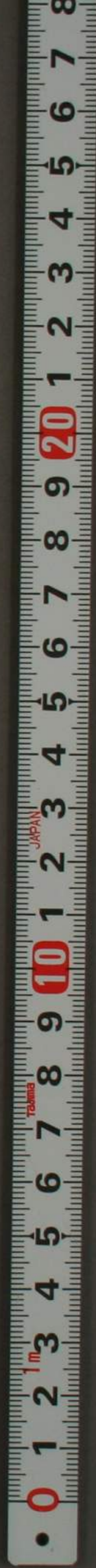


信達風土雜記全

ル 4  
395



信達風土雜記

合冊

乾坤

信達風土雜記  
 夫祈茗被叢者難與道純綿之  
 美麗羹蛇哈猪者不足與論醜  
 醜之滋味今吾在東奧生於卑  
 賤之中長於蓬茨之下無有觀  
 察傳覽之知顧有願愚陋拙  
 累不足以塞文望應言者雖  
 敢不略陳愚心而抒情素矣  
 首在

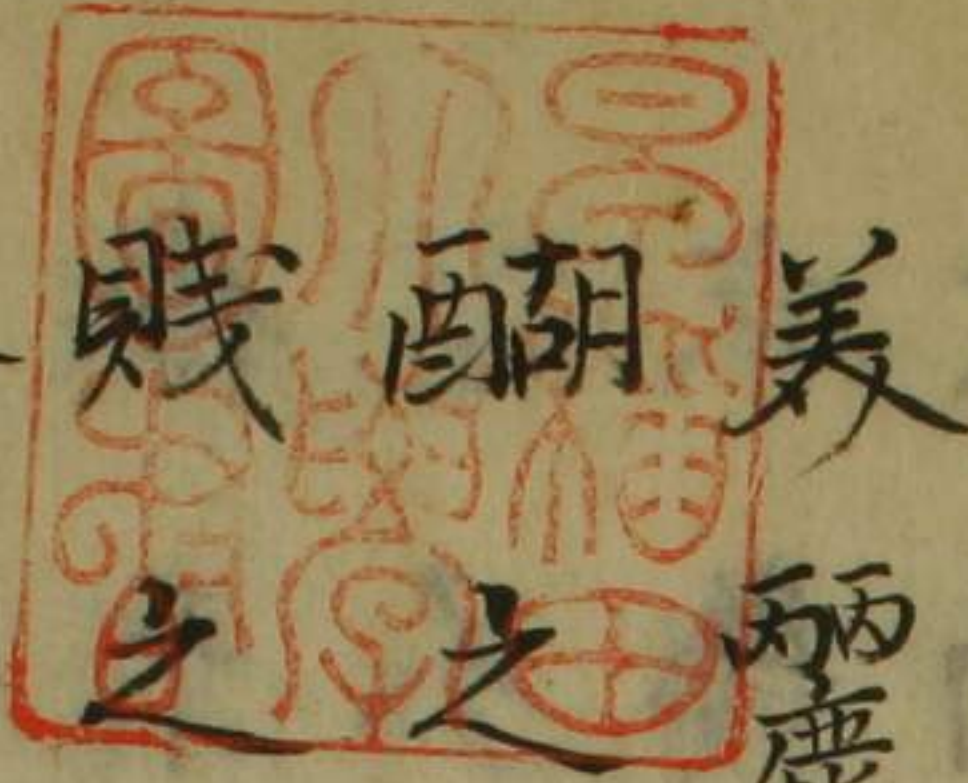


西村屋兵衛  
 御用  
 田



門 卷 395

信達風土雜記  
夫荷茗被蓑者難與道純綿之  
美麗羨蛇哈猪者不足與論醞  
酬之法味今吾在東奧生於卑  
賤之中長於蓬茨之下無有觀  
察博覽之知顧有頑愚陋拙之  
累不足以塞文望應言旨雖然  
敢不略陳愚心而抒情素矣往  
首在



聖主其御宇時行基菩薩奉  
詔巡覽於秋津洲始而置於國  
縣境鄉里自爾以來稱郡號莊  
或依于山水美景賞乎名所又  
依于哲人留名翫乎奮蹟者連  
今不歎矣于粵有國号陸奧去  
京幾一千三百余里也東方境  
於兩郡之海島南方跨於野常  
之兩國西者並越山之皞雪北

者交于出羽之寒風地方既七  
百有余大管五十四郡大大上  
上國也從江都入此邦始而有  
關之名号白河也此處者古人  
賦於詩題歌之名蹟而遠聞異  
朝矣所謂白河關高玉繩下彼  
薩天錫之於夢觀集載之而勝  
境秀倭漢矣於今在人口也

寛小して神よ爰候も道懸し又白川の関の嵐よ  
 後香取院  
 耶と云候もやまふ立しかり秋風を吹白川此関  
 能因法師  
 便あははいと都へ告やらんりふ白川の関にさぬ  
 平直盛  
 白川のせまこの関守いさむも時多う秋のちいさ  
 定家  
 都と云花打をさして出しかり月をさるる白川の関  
 左大臣  
 白川此関のちり地のかみ綿月を吹て疾風のさす  
 家隆  
 都出て日かき冬ふなりふり時多きをさるる白川此関  
 藤原秀茂

東鑑才九文治五年七月廿九日二位殿白川の関と云  
 る八関此明神 活奉幣阿ま爰よそ京季と云しして

今既よ秋のちい先之能因法師のいみしきと思ひおこ  
 うと云ふひい京季馬と云しして

秋風よ草木此土候と云候にせそ春のちいこの関もな

風流れしき先や奥の田植うき 芭蕉  
 秋風のきりてんこの関の秋 花柳  
 白川乃秋風入るり青あり 馬車

白川此関やと月のもの。軽人の心をとむるさり  
 西行法師  
 都出てを逐取部し折をそふんゆそのし白川の関  
 向か  
 白川の関のあるし乃宮ねあひしたてし折を後  
 為氏  
 雲れ波岩をそ流し足ゆりし流る流る白川の関  
 俊成



秋風小、平松、の竹の復れ旅

法指雜舟

從關過於一百廿余里而有福城所謂伊達信夫兩郡府是也

陸奥北之ぬら星小姓とて名こそる國と都は後也。

君とては信史の星、ゆめの成を藤の山の表をさ、藤本深野

あやなくも星はぬら星といふ、橋本仲

東路の信史の星、やまといひて名社の國と都をさうらふ、あはれ

思ひや、後成

意とのとぬら星の乃らとて通ふとる、道具

福城 起 倚 逢 隈 絡 繹 行人 過 市 坂

奥 跫 信 夫 名 郡 邑 題 山 詠 石 古 傳 來

城 北 有 銘 山 号 信 夫 山

之の取居ありむ人の奥とて信史の山の奥とて

郭之程初なりと信史の山ありて雲のたるとは

ふれ道のともとて雲とて山の山花ふこもとて

つらせ人のぬら星の下の下めとて、二条院前

岩はくし、白土常陸

人ともひる、宮家

宿いんた、新阿

冬をく、新阿

物もやよのぬのぬれ桜花風

中納言

こころもちかきもこころも

定家

思ひおもひのふりもこころも

信実

よの書も書ふなまをせよのぬふるも

寂蓮法師

光風くーいまそや深き深き

権大納言

あつこころも石もあつこころも

深守法師

よのぬふもこころも

甜茶

今朝よりいふ處もあつこころも

兼平

よのぬふもこころも

関野利仁

こころもよのぬもあつこころも

兼好法師

よのぬふもこころも

兼好法師

よのぬふもこころも

藤風

よのぬふもこころも

二方楼

よのぬふもこころも

山階左衛門

よのぬふもこころも

兼宗

よのぬふもこころも

隆任

よのぬふもこころも

兼宗

よのぬふもこころも

隆任

よのぬふもこころも

兼宗

よのぬふもこころも

同

よのぬふもこころも

同

よのぬふもこころも

同



あききつわな流きよみん陸奥は思ぬの山の雲乃あり

後成

涼ききとれは冬風ふくま多うつて思ぬの松や思ん

顯照

人とも思ぬの思ぬの山の瑞ふれの色となき春あそび

家隆

うよんぬあまのさしを深とゆるあす山の口あ

後一系

あふもて冬やこもる陸奥は思ぬうそ秋風を吹

家隆

ういこても意てふ流やこもる思ぬの草のさ風

定家

冬傳ぬふの思ぬの思ぬの思ぬの時もよきよんせし

同

郭ふ思ぬの思ふよとなしてよんらのものさるまは

家隆

海と一橋むふの思ぬとて思ぬの思ぬ道とゆるく

知家

里の名も思ぬふの山の花さくの思ぬも不味なり

光信

いしゆも思ぬれ山の思の落せし秋不成るる花

國親

陸奥は思の思れ山の思とてよあやしり社言や思後

行意

思の思ふれ花いろさる思ぬの思も思ふ思風

定家

あつしれ思とて思とて思の思も思ふ思風

後成女

まゆり思の思の山の思後しり思ふ思とて思

範宗

思の思ふ思の思の思や思思思思思思思思思思

康光

かき思思思思思思思思思思思思思思思思思思

道光

思思思思思思思思思思思思思思思思思思思思

雅經

思思思思思思思思思思思思思思思思思思思思

後成女

そのぬきとくはいと多しはんとすてはたのむまの  
わくらやとてつて人よのいふまじきいふのぬき少なり  
ぬきやふきこそともいふぬき山の奥の一なり  
おとてふ谷と伝は隆興のぬき守り甲斐なり  
隆任  
二官  
雅經  
具親

林鹿有黒沼神社及杉野目大佛殿峯在  
羽黒権現覃末社諸天宮也桂樹山願青葉  
山戯華愛月留心遺詞古今後達詩歌有  
若干首矣

羽黒権現實寶祿有洪録呈書奉鑄羽黒権現鐘口  
百六十貫目弘安二庚辰年三月晦日

て女より草峰山の山嶽を履くはし雨氣を多し  
人目のくせぬる果もゆきをたれんかうらと栲やま  
なる多やとてぬきぬきのあひまをまはすよとまぬま  
隆興のよのぬきぬきをたれんかうらと栲やま  
よしまのぬきぬきをたれんかうらと栲やま  
我亦くよのぬきぬきをたれんかうらと栲やま  
ぬきぬきをたれんかうらと栲やま  
ぬきぬきをたれんかうらと栲やま  
ぬきぬきをたれんかうらと栲やま  
家隆  
中野々  
新王  
大申空雅  
大上天皇

羽黒山権現奉納

信守山権現花の河... 松さく白ふ山の春風  
初を辰洋む目あてしとふの梅山  
人の子れ大急乃市や忘の梅山  
社擅... 忘れふ山かる菟女高苑  
早乙女と信を忘れふの...  
押折ふの信守乃山の春風...  
夕風れ... 凍... 信守山  
猶草や神も信守の山めつ

福守寺

風神軒

菟女寺

露沼

南野寺

泊鷹

三浦肥後守

文水

本田見掛院

扇揺

松山寺

秋扇

横田備中守

雪井

相良寺

洲

作... 神の形... 信守山

平戸寺  
冠山

豊... 推護乃... 信守山

上杉強右衛門  
観字

の... 花の... 信守山

松雨

神... 花や... 信守山

梅之

而... 花... 信守山

家隆

神... 花... 信守山

幸喬

羽黒山萃表建立記

陸奥國信夫郡御山村羽黒山権現者傳曰  
敏達帝之母后石姫白皇后社也星宗相 己

千有餘年萃表亦斷矣與羽之生民無不  
致誠心於當社雖暴雨密雪之日拜趨之徒  
往々不絕矣予丙寅之秋移食邑於當郡  
丁卯之年辱賜休暇而來在於福嶋始經  
歷采地封疆之日登此山足履嶮岩手拂  
蒙茸薄霽散而林霏披層雲還而巖穴鎖  
踈松影落閑闢之色猶且今老杏陰深岫  
崿之緣如隔世默禱而立廟庭寶燈光冷  
金鈴声幽中心肅然而神其如在既而嘆

萃表之欠政教之所及可興百廢况靈場  
乎因新造立萃表而請儒官竹野筭以書  
羽黑山三大字遍其上以仰不測之神光云  
貞享五年戊辰復五月十八日

從四位下行下總守堀田氏紀正伸

從麓到訖山上峻坂十余町也其美景每  
町爲百倍矣爲此初發訖睫畱飛訖瞳光  
無眺望際限且登磐石先藐眎於西南者

吾妻嶽峙雲端巔屹岷岷焉思山孤煙者  
靡風之景色時左時細揆蒼穹吐白雲周  
廻數千步飛鳥不翔猛獸不走唯取石硫  
黃之人罕通于此未明先見海度日之絕  
頂也山形若富士峯常帶雪也雲霧瀆於  
桶沼疾風埋山巔乍晴乍暗于變一刃化更  
無窮也古翁傳曰於西崑中在東屋沼神  
社及東屋國神社皆俱大祖而四時之禮  
奠更無絕矣具載延喜式焉何代何時廢

官社而今也無知其迹也亦山頭

幸と雖も志多るるをいふことりもせしむるは

顯昭

人々もあも人々もあも思ひたることいふ

亦人

あつと家あもあもいふこといふ富士の根

為家

うき無明のふんきふんき思ひのふんき

年と神と絶つ思ひのふんき煙を物と消ゆる

山頭何支寄幽懷 切々悵々心膽摧々  
孤憤衝天無限恨 煙雲日夜獨相哀

身をたふすべしと深く下り思ふ人の思ふをたふすなり 具氏

昌打やあまのふと二ふくふ  
春のやふふ富子も田子也  
少いふふふのりり人煙の

佐川 雁風  
白路  
鳥川

幾積遠山雪 人家未滿度

來年六月未 始見此山青

相並有鬼面山岳嶮峻鑄以石應知其風  
情暫眼察於彼山上晞春日溢露遡秋夜  
鳴颯窸零寫柏楸霏霜封枝條木繁後葉  
緣叶未秀先凋雖絕倫之嶮路到會陽有

間道也稀有於爰通者勝於蟠蜿蛇岬應  
登毛戰栗也且田野四月冰消後於干此  
山腰看如扇形之有殘雪年載雖瞻仰之  
為甚奇正

鬼面や鬼面のまのふと二ふくふ

突出崔嵬鬼面山恰如盤礴散雲鬢  
人間四月冰消後笑見陰崖白粉班  
ハ雪を履うのひき根の雪乃を花よりえ鬼面の山  
半腹有戀路山為語木林也杜鵑啼年碧樹

舊情僅殘詠歌而樵牧於是泪瀾干如雨

陸奥の三の殿に星よ及たあまのまをよふの根 西行法師

こゝろのぬれ枕のちりまもほゆりてや意てよまのなを 良教

小瘡あまてわくく山の郭をむき寝る人の 肥後

かゝくひのあまのまをちりて思ひの山の 大伴直女

會於干此山中溫泉有三所所謂土湯潤

湯高湯是也其土湯者能治中風也式有

人風氣攻注四肢骨節疼痛手足癱瘓魚言

語震洪口眼喎斜左麻右癱羊皮不遂而

為人被負等之病者浴是則不旬而得現

驗自步行歸者不尠故鰻魚花日新也於當

村在

真至願皇宮尊像者邑民等傳謂厩戸太

子之直刀也靈瑞繁多而不可演示女卷也

太子堂題八影

古寺老栢 鳥川宿鷲 半茶秋月 鬼面玄意  
河邊白鵞 一坂眺雪 溫泉功徳 女詠漢意

幸歎不自ひとすしてこれるの常久安庭の栢

こゝろのぬれ枕のちりまもほゆりてや意てよまのなを

かゝくひのあまのまをちりて思ひの山の

あはれも石のこしらへたるやうな石の山あり  
幸に産く通る道や妹名のためなき思ふ所れ未だ  
谷のくさくさたるあはれ川の毒のこしらへたる  
のりもくさくさたるあはれ川の毒のこしらへたる  
いづれもくさくさたるあはれ川の毒のこしらへたる  
東鑑第九鳥取越等具載夫書之舊蹟也  
欲登于此湯山而有坂名謂一之坂從是登臨  
信夫浦眇々而為霞於限雨勢夕雪朝  
漫々如海子有餘年之風骨有目止丹也  
いづれもくさくさたるあはれ川の毒のこしらへたる  
二条院後

石や煙や何ふやうなるか海の何まじり火 家隆  
人目には露の浦、あはれ何とて絶え引く所成 深草氏  
月と海と都をぬれ海をいして浪より外小島信也  
いづれもくさくさたるあはれ川の毒のこしらへたる  
入道花園  
大政大臣  
今とていひし一之坂は浦のくさくさたるあはれ川の毒のこしらへたる 為歌  
又一坂、下有平原石雖謂吾妻林中古矢  
其處也殘人口有古歌出之今呼謂滑拂  
地原是也  
漸晴而信夫郷之民居点々而如星散在云矣



小倉寺	荒井	小嶋田	関谷	田沃	箕木野	吉田	福嶋
沃又	下村	前田	平澤	浅川	森合	成田	郷野目
八島田	佐原	鳥渡	永井川	金澤	曾根田	庄野	鳥谷野
和泉	二子坂	荒田目	八木田	八丁目	腰濱	土舩	大藏寺
小山荒井	庭坂	山田	大森	天明根	清水町	櫻本	黒山石
御山	山口	小倉	内町	鞆園	石谷坂	野寺	二方木田
							赤川
							二井田
							上谷倉
							下谷倉

五十部 岡部 渡利 水原 土湯 高倉八万七千四百  
北六石七斗五升余  
 其中信夫山者如金石而累積雪湖水之  
 昔時者掉一葦而漁父無釣于沃之今日  
 鞭牛馬而田夫進農稻波洗畷百穀貯倉  
 也亦衰斜險北里余丁而有潤湯是能瘥  
 眼病而其功尤妙也

北、方攀コシテ谷コシテ於陰藁或涉滴瀝於溪水山  
 山コシテ於湯コシテ小多コシテ子コシテ多コシテそコシテろコシテんコシテこコシテ多コシテ  
 既白

豁五里而有高湯療諸濕瘡治疝氣以是  
遠客常不絕三湯之功能各揭正考

色いきもいさ——岩根に岩はく——流る湯の山錦をえん

二部のもろふとたや湯乃を流の花

月多ふあき源やあはこく

毛は空へ入や湯毒の部

尾羽  
馬羽

從是嚮山上分筵登示折柴下十余丁而  
有潁泉号不動瀧也緣樹覆四山雲變  
水如從銀河瀆落瀑布數千丈包巖角常

為窳窳不見鱗日砒聲谷幽岫啾咋流下  
如湛壺而似監郎湏川水上是也

と新いふは流のな系深習てソアの風と流を和ま

ツ多や湧形に流て不動瀧

驥臨林鹿山腰北余里式老松莫々而緣平  
林岑緣竹以萎々圍平山畠也楓葉桂花之  
美景與長而幾春秋枝葉露滴苔根巖濕  
始為源泉くく合而為巡湏川天戸荒川  
是也則自西山流出三河而入隈川矣又

荒川南於鳥渡村有古壘曰朝日館也正  
嘉年中佐々藤庄司之一族信夫小太郎居  
之館下有靈佛謂孤山寺新迦殊勝尊容  
也今安置陽泉禪窟焉

公亮やまもと孤山のりて紀

既白

陽泉寺門前西の方かき山の上宗匠山塔を信ふ大く下りし  
石塔三つあり石面小汗陰三つあり首作を彫り石小書有る文字  
かきあり見ゆる三和二年癸丑八月九日右志ハ為慈母三平氏  
有る外文字ありしと定る小見しハ世所より山と下て  
西の方ハ山王権現の淨宮を往昔仙臺中何某の建てる

のりて之傳りしと云ふ事終好々ありし信人の事傳風を  
いしるる事終好々ありし眼病の者之類して平癒  
の者多し淨宮の後より名のとありし淨律あり

回首望東北遼遠而不及眼力雖然騁思  
於其赴夏於此四十余里日出之方有靈  
山之城趾季山洞幽霽第<sup>アイトノツラ</sup>林<sup>らウ</sup>宮<sup>コウ</sup>元<sup>ワウ</sup>婁<sup>ケイ</sup>瓊<sup>ケン</sup>嶽<sup>ソウ</sup>嶺  
峻金岸靖嶮東折<sup>ツクリ</sup>宇多郡西臨平廣瀨川  
上無陵虛之巢下無<sup>サキ</sup>跡實之躑<sup>ケキ</sup>搖則峻挺  
不可與以言演也曾聞<sup>サキ</sup>奧<sup>ケキ</sup>品<sup>ケキ</sup>之國司北島

中納言顯家郷居之威官懷民棠花隴國  
金宇玉堂日夕映々

太平記十九卷奥州の國司北畠源中納言顯家に去り  
元弘三年二月に圍城す合戦の時之活せしむる義貞の  
力とくくそくそく西海に漂へて其奴の大功なりとて  
結成將軍小成しとて又奥州へ飛下りしる其  
羽衣の官軍破りて一帯より還幸なりて飛山溪の  
古宮に幽居せしむる所ありて金條の城にせむをこし  
義貞朝臣自害せしむるありしとす一後して  
羽衣の官軍破りし時多し其後多しとす一後して  
終に伊達郡靈山の城一つとちりたりとす一

ふいりりりり所ふ 主上の吉野へ渡幸なり義貞を  
北國へおもむきしと枝原をりしとす一又心の心整りて  
僧侶の法より多しとす一羽衣の官軍破りし時多しとす一  
廻文の便直りしとす一後保正野入道に忠と  
始に信実信達西郡より六十余騎して馳りて國司北畠  
勢と合ふ余騎して白川の関へおどろきしとす一十四騎の  
勢成僧より多しとす一後保正の代あり  
此山昔日金城地空暮日蹤幾威吟  
一遇賊臣逆焰煽為君輕命義心深  
弟も本と信実の代ありしとす一

伊範

仍秋と云ふ事ありては、  
松尾

松尾

雖然衰廢建武之騷乱而奉命於朝思之  
高止名於泉州安部楚不知在魂魄何岐  
可謂忠義之賢臣也

右平記十九卷師出所々の軍兵を拒絶集て 和泉の境河内を

故敵國なるもたさして常小恐懼するも、  
好も大和國楊も力と命とをへし、  
甲申小退治を處し、  
おてぬぬし、  
引取らるる官軍とも被りて、  
こころ戦とつとも軍利なる、  
諸軍散くふありし、

引取らるる官軍とも被りて、  
或千騎をも大敵の国を出入し、  
其成功流小して、  
して付死し、  
矢ふりり、  
首もと丹後國位、  
刀と進後忘たり、  
一、  
能治る府の將軍、  
号ふらと九刀の遠境、  
一、  
其実会天下の官軍、

聖運天小不許武德時より其謂もや股肱の重臣  
あつたや、戦場の草の露と消ゆふ

古諸候屈膝度頭今賤女伸肘折蕨楹前  
排幕物見岩野客擔息汚巾鞋雖古郭悉  
破壞一株杉今昔翠春尋芳草秋愛蘭菊  
雖徘徊于爰未見桔梗邑民等傳説曰爲  
桔梗云婢妾金靈山落城也黃門甚憎之  
於今山上無桔梗是彼以爲婢妾之石也  
勇將之怨慊猶有余光也

懿曰桔梗之説甚俗也顯家々於泉力加安ア整討死聖靈山之城何  
得無事乎雖非婢妾之謀斗雜保亦サモアウハレ天下之真家將以  
同名之故何憎巾木乎可笑也唯凡去不應故聖氣

一盛一衰在夢境永崇其德於爰久矣墉  
門嘈々留蹤礎礎晰々殘叢鷲鵬棲于巖  
塊獼猴標果風捲朱簾氷花鋪於白漚  
四序爲此矚然往昔者爲天急之靈岨房  
舍亮于山谷梵音常響飄然峯有護摩檀  
岩屈菩薩巖罩天狗岩兒之巖石等名林鹿  
山王權現社及南岳山靈山寺等於今宮

殿歳重也大鳥建華居大門有樓門之舊  
基徒残名而已不知何代改之而武門之  
閣都近郷之靈跡繁多不可悉記也

湯法とく跡とくうりていふ乃名とくをてくせ秋の夜は月  
なるかたよの周も照さるる名もくは龍は山のあきの秋の月

萬里雲飛夜寂寥嬋娟孤月印青霄  
昔時深愛寒山子相指相誇笑不消

靈山林鹿西於掛田邑有茶碓館是伊達何  
某之居而雉蹤魏々在於爰亦於當村有

老松名謂陳場窠四時倍緣枝條赫々而  
恰似田龍之望雲也村老傳曰往昔伊達  
何某採庵於此矣

俗言も傳て茶うよの館も新庵多る月本の歌之  
掛田村、庵も枕流庵とあり南庵と親何と云信風雅  
とあり十景と記して有り

茶碓館表とくは辰乃神や我ら子茶臼館と立するもく人  
柳沃風華まろく三より柳沃風華吹けてみよりの辰弟る表風

田沃風華いさるまきく海と春見る夕や小田沃の波とてか宮大  
靈山秋一枝とけ一花をまひるくまらけいさ秋の夜は月

善山紅葉 深ふりり秋や善山の中おまゝいづく時あゝ雲々々々人  
向戸耐雨 ありあつてもとてはも雲の向をなげくまもなく時あ  
小川水多 産之て小川の産や水むぐん谷とくろをいふ多の産  
松田控籠 ひとよりて成代なる思ふらほく照くを松田の産  
撤田晴嵐 夕野の多この山を吹まはれて流沙雲の影を  
抗流急地 才此やとてと多他の山を流す松流して  
從靈山之下至隈川之耳呼是曰東根ノ郷  
也此處大凡平原也以爰築塘待降雨湛  
水僅流之而作佃畝也雖非大旱每復穹  
而民苦渴<sub>イ</sub>年久矣干嘗米沃家之功士古川

氏善長巡察郡郷見聞其赴頓發奇計而  
於廣瀨川上大門邑新令鑿大溝壅廣瀨  
川而隸流之也一渠遠輪九餘里也水勢  
窘峽洞洄泓隨山腰大彎逆流而廻數十  
邑名是謂沙堰也水分万流如亂糸也魁<sub>イ</sub>  
新膏暎共汲恩澤之深數万編戶<sub>イ</sub>穡佛而  
煎廩倉區宇雖饒八埏流下民潤不知渴  
水之憂者皆是則善士之遺德也

廣瀨川ありの小山せき入る神下平在り苗<sub>イ</sub>非<sub>イ</sub>法<sub>イ</sub>定<sub>イ</sub>田<sub>イ</sub>



八月五日行... 廣瀬川... 頃...  
廣瀬川神... 頃...

亦近邑於八幡村在龜岡八幡寶殿也往  
古從相品鎌倉勸請鶴岡之神社於斯處  
也熟億其号有龜鶴相對谷實有故寶殿也  
伊達成宗鄉之建立而文明年中造旱之  
中頃又移是於仙府於彼處龜岡之名也  
當社別當謂龜岡寺每年卯月朔日八月  
十五日有大祭而遠近之高傳為群集也

東根縣魁於梁川有古墨傳聞往古豪貴  
之英傑魏々守柵中頃米沃家藩臣湏田  
氏居之又保原步頭有古墨天正年中伊  
達家族中嶋氏居之也梁保之縣邑各每  
月為市六度其生產者紙真綿糸紅花米  
襪菽稌稗稔稗其外畠穀等數品也

以備村中... 京都の大文字妙法... 白根下の...  
京都の大文字妙法... 白根下の...

新なる谷川に流るる水ありのふとわたりて故に其所の  
谷にせしむるに靈佛なり

所謂東根郷者大凡

所沃箱崎 高成田 伏黒 小槻 保原 大島

中村 市柳 富沃 柱田 大塚 大青 金原田

石田 山川 山田 掛田 高子 新田 柳田

塚原 二袋 粟野 川内 八幡 舟生 白根

園波 大門 泉原 大石 石田 牛坂 瀬戸

玉野 細谷 仁井田 深赤川 此高凡四万千二百二十二石  
四斗四升余之 亦盼睐而睇 於西北者眼 下田圍如絲 秋尾

又似盤面香ハルカ當乾有嶺トイセツ名謂茂庭此巔  
者近千羽之龜岡文殊之靈窟也

茂庭村中玄廣一題奇を板橋 庭原の田も

音もこやむしりく清て板橋のとうろく平通ふ少人  
松の根花さきさきわる庭原のむすむす白ふ花をこれ  
三川の男これ田もこの枕おもて草の茎の名源も  
里をこまき鳥の雲の山の中庭も庭も庭も元位も

凡山邑嶺村 嶽舎茅屋數百戸常以伐木  
狩獵為業一村之老少ミラツテ分郊野行嶺ニシ嶺ス嶺  
凌キ亦岸コサ簪イ六花奔横而似雷行チハシ壘ツルイ奮勢力

如躍如怒矯々趨々躁々如趨龍勇氣塞山  
谷誼旬鄉音巖岫於干爰獸狼狽而轉輪于  
時翼不暇張足不及騰動觸竹鎗舉則飲  
玉火四隅勢脅極獸喚嗥而雖張牙奮鬣  
鬻獠徒更不懼揚拳搏鱷鹿捕熊羆式批  
猪桎牙拉狼摧骨矣卞莊馮婦應為之耻也  
有省罷獠收矢磨斧伐木榭椀良材盡山  
埋谷漸荷之負之浸於溪川待於廢水而  
流之摺上川河是也伊達與信夫隨此流

為境川流凡三十余里也於中流有渠口  
謂穴原号湯野村堰也掘巖通山水疏賣  
中逮三四里也堰水灑於萬田為陸沃潤  
黎庶矣於富郡稱是古今無双之堰水也  
流下四十余里陔阜三十余村滲水縣  
綿無絕也是寬永年中上杉家良臣古川  
氏善長肇所鑿之也源自穴原至于隈川  
處于西邊庶民農業間以漉紙為業每家  
乾之也醴々而若堞墉連々而似城郭矣

出於爰而有古館号西伊達斯郎仙府伊  
 達豪家之臺臣宮萬雉之基趾而崖高塹  
 深素々而兀然麓在伊達常列念公墳望  
 疊々矣西阻産沢而於万勝寺村有觀自  
 在之靈像諸人為往詣屢有感應矣南方  
 並於平沢村竹園有葛松原至是台岳之  
 僧詠歌而終季之地圓位慕其情懇杖之  
 舊跡而於今有松原禪寺也

西行法師撰集抄曰維首隆興國のりくさかすまうて

作りし... 忘ぬれ部小苗乃松原とて人里をくもあまの  
 新なる部くふ山も何く又わきあふや... 云はく...  
 か... もき... せん... 下... 草... け... て... なる... 法... 水... 乃...  
 なる... も... せん... せ... ら... せ... ら... せ... ら...  
 せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら...  
 せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら...  
 せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら...  
 せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら...  
 せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら...  
 せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら...  
 せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら...  
 せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら...  
 せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら...  
 せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら... せ... ら...

昔ハ應理山宗ノ学徒トシテ公家之梵筵連今ハ  
 諸流浪乞食トシテ終日葛ノ松原ニトル

世の中ふ人ふを草の松原とすも... 松原ニトル



東海にあらはに及とゆわりつうとてきこ下海の開  
うのいともあつと見え思程斗通つゆせ下海の開  
立海り又や危なりと書く人今とけ思下海の開  
あいえとてあつたかむ中なるあつとけつてき  
季經  
左折岩

志純の書るふとゆわし紅毛の邦  
下海の開

松雨

東鑑曰文治五年八月七日二位殿既、奥州伊達の邦  
あつ、いふ山あつたかむ思程斗通つゆせ下海の開  
河能者とゆわると命あつとてきこ下海の開  
二位殿あつとゆわるといふとてきこ下海の開  
とあつとてきこ下海の開  
とあつとてきこ下海の開

庶幾、伯父季經其子源左衛門長季前住是以之或百常終  
とてきこ下海の開  
とあつとてきこ下海の開  
とあつとてきこ下海の開  
とあつとてきこ下海の開  
とあつとてきこ下海の開  
とあつとてきこ下海の開

題小坂峠諸歌有  
怪石陰崖峭壁長  
征夫難進遠半暘  
風翻紅葉積峯裏  
吟賞忘歸到名陽

千峯頂上有茶店  
一水分山通碧碕  
巨川映日東西折  
行客勿謙攀巖峻

穿窬踰雲登得懸  
羊密開道近青天  
積雪吹寒西北連  
絕勝世路起風烟

嶺岨嶙峋石經長  
翻々紅葉今如錦

費鞭馱惱吟腸  
行路難中帶夕陽

伊達深の所存と平橋の川田の形

少坂峠小石動壺有仙人是行と持ふ嶺小龍亦あり  
長坂也伊達と荻田の境なり

伊達郡八剌和歌

千峯頂上有茶店  
一水分山通碧碕  
巨川映日東西折  
行客勿謙攀巖峻

千峯頂上有茶店  
一水分山通碧碕  
巨川映日東西折  
行客勿謙攀巖峻  
穿窬踰雲登得懸  
羊密開道近青天  
積雪吹寒西北連  
絕勝世路起風烟  
費鞭馱惱吟腸  
行路難中帶夕陽

疇昔藤原恭衡構阿津賀志山於城郭而  
卒有<sub>下</sub>所爲鑿之塹址乎是源家東征之古  
戰場而於今耕夫穿刀出鏑也

東鑑曰文治五年八月八日金剛引當教子孫と川邊へ  
あつりし山の麓に陳と名二位殿をとりて治んが爲に  
卯の刻に富山守常忠なりし山守朝光の族は常  
常廣之族も此常朝光同三師朝光とつりてさき交合  
のわがしと村を定め治ん秀保是も破るも一と秘術を以  
て責戦せしつりし過念多の大親朝子と入勢く責あて  
りるる己の刻も及んで計りしと引退く大守秀の細  
大守常の歩還て合戦敗北のりし大守軍國衛のりる  
法成しとつりし治ん己ら治んくともわりのりる

東鑑第九謂伊達郡藤田宿者則有新山  
麓也又石母田村中

東鑑曰文治五年八月十日小山七師朝光在宇津宮たふ府  
朝徳り常守紀授守は常朝光大友と下七つりて  
去り候ふあるはとある月者と一而くもつりてある  
治能ととあるひ出で伊達郡藤田の宿に常津の宿あり  
去陽の山なる水郷ととく大守常の上國衛は後藤の山と欠也  
周とつり候ふ板とあるひて射りりる城守是も陸奥  
三ヶ所も弱しとあり敵のせあるは後守常ととくあり  
ものありて大守國衛ととくしは常津城守と外ありり  
曰伊達郡藤田宿に常津の宿ありとつりて去陽の山なる水郷ととくして  
とくして常朝光也常朝の宿ととくしてつりて常朝光ととくして  
とくしてつりてつりて



傍山腰有一株松蒼々如卧龍  
葉蔓蔓四  
方樹下百余尺其根四圍羊村民傳曰源  
義經腰掛之杵也西郡無双之谷木也

唐傳の寫根と云いふ松乃蟬  
韓竹小多や松の下と云い

桃隣  
既白

往昔英雄腰懸松 赤皮剥落偃蒼龍  
在秦可任丈夫職 唯有芳聲橫危峯

東 蘇 雄風松樹下 詩客訝蒼龍  
不貪大夫祿 孫枝子葉濃

又

太夫今古色 枝葉宛如竜

遠客徘徊去 吟中詩興濃

又

松樹幾千歲 何時地卧龍

義經今不見 偃蓋望中濃

又

英雄千歲愛 朶々卧如竜

風起客愁切 今誰弄興濃

君紫陽之血道人

櫻葱の松やひしふ風うなれ

佐川南  
文中

腰懸松のや、亦ふ山のふ玉見明神の社は是伊達明神の  
和備後小伊達明神の神院

も何人ふあ〜〜いふふ〜もきふ〜つ〜ま〜る〜とひ〜わ〜  
おと〜〜ふ〜あ〜い〜あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜  
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜  
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

亦於此邊有謂硯石奇巖往昔源義經君  
發於東奥之時于此處并慶卯着到以來  
雖旱魃更不水渴傳于今之也自爰東於  
大枝村有古館曰綴麻ツマ天正辛申仙臺

老臣大枝氏居之也桑折與貝田之兩懸  
有藤田之左右近村雖夥館陞舊基不違  
悉記焉也其土物者山録珍材絲綿紅花  
紙逮米穀蠟黍黃連熊膽鹿皮猪肉雉子  
兔躰鮎等其外畠穀數品桑折與藤田之  
兩懸每月各六催之市出之交易矣呼是  
近邑都謂西根鄉也  
西根鄉大丸  
岡村 長倉 桑折下郡 上郡 谷地 伊達崎

向河原 塚目 德江 藤田 赤山 大枝 大穴洼  
 五十沢 光野 貝田 石母田 山崎 内谷 鳥取  
 小坂 泉田 羊田 成田 松原 牛込 増田  
 萬正寺 平沢 板倉 湯井村 茂庭 陸野目  
 此高合凡三万二千九百四十六石六斗二升半也  
 自桑折隔八里南有瀬上駅謂街西於宮  
 城村是往昔鎮守府將軍源義家奥羽征  
 代為旅館而勞士卒休駿足之處悉近隣  
 有石跡也又沂洄於槽上河十余里而有

温泉斯處於飯坂也是元曆之古佐藤庄  
 自治信覃嗣信忠信之居城而櫓櫓並イラカ薨  
 魚虎輝鱗旋臺九重而雖聳於連山年月  
 崩烈今也為民居田園之菜菓自為蘭粹  
 石磊苔滑井蜘蛛喧阜南殿櫻花不忌昏曙  
 陰山紅楓穩暮繡錦矣亦於當邑有佐波  
 古御湯而有古歌

あらうつしり列の位置、佐波の尾、山阿、  
 江古より時、不、佐波、古、の、湯、を、と、つ、も、多、曆、久、  
 こころなる、の、新、の、人、の、今、の、新、れ、湯、なる、と、と、之、部、

高村の湯と佐波の石の湯と云りやいふ一川と  
尾くくく南の方より北のときと云ふ名不詳

東澄も原郷の帝統伝承の佐波庄司を  
次信忠信々也  
と云つた高村の湯のありしは何時の事か

南隔於浸小川而有藤氏之親族之墳墓  
杉松森々而守翁仲之處也

陸奥北小川の橋のありし板屋の遺蹟あり  
はくし...  
五波れかるけと久し居る小川の里ふさる卯の毛  
後撰

此寺ヲ号瑠光山醫王寺也義經君之笈

舟慶之筆迹大般若經逮藤氏之短刀等  
有此蘭若而歷然而五百年來之爲記念  
也自寺隔民屋有丸山之舊蹟矣源義經  
君遊於此殘戲言

佐藤庄司夫婦嗣信忠信之法名

奥性院殿缺山勝心大禪定門 佐藤庄司  
光明院殿玉花昌蓮大禪定門 同 室  
吉祥院殿八過次信大禪定門 嗣信  
清光院殿劔勝忠信大禪定門 忠信

元暦元年  
三月十日  
八幡付死  
文治五年  
九月廿二日  
於吉野死

次信廟

讚品高松

園部拙作

五百年前汝是誰恰名譽遺戰場岐  
紅桃簇處平家旗白李色群源氏旗

又

次信忠切天下顯能登武勇世間知  
感看未代英雄士淚雨沾中洒石碑

佐友涼一丸山一ツ世を八多り

古多也心ももれ心ひひ

仰看石塔墓秋天二士廟荒歲月遷  
南殿名空枝寂々小川聲冷水消々  
佐藤遺館信夫里八嶋餘生吉野邊  
陣迹幾年切未朽老松殘綠寺門前  
露更して鳥のこゝろを芭蕉の那

双碑荒廟寂寥空南殿櫻鬪苔經紅  
尋故如今生別恨幡竿綠竹戰春風  
芭蕉為真此印道よ去月の悔の後を眺み  
しるる。如忠佐友庭月、田能を左の山際一里斗り

版板の星伍傷中へびて居くは丸山と云ふ所あり伍後  
唐門の田舎之林蔭に大字の條あり人のあつたは小徑に酒を  
落し思儀小一雙の石碑を所中にも二人の塚の中先を  
のひくお石の世もなすゝあるおのれと杖を思ふし思  
式人ば中より給よりして直のゆると心ひ侍りて名をそれい  
是れとて思ふとて碑の前を投ししるは  
石のき先よとあるも君の玉の結の結てなるんる所  
誰のつとふとこしすともるも道号と先しく奇あり  
おしとてお加くしとふ玉の結のなとふらん今の在すてい  
八宮縁紀之人五百二代後小松院の御宇永徳年中二月十日  
乙亥州伍後の親親のしりて竹堂と申し門後品武州の時  
基よ侍りし

痛くもや君の命とつき伝ふ塚の中を昔も後も思て

其時極れ月より

惜むしもも今もその形くくし身と捨て社名とつて

右の款ハ信縁記を字しある

右兩條感よるし終あり誠小忠義の靈魂回くし

いしとてしと

右醫王寺何の時代小完記あるしとある信職と八十七世ト

すくり寛延四年小祀之 當時實相義経君の笈亦慶ら

等縁金字の大殿着座依後葬禮の時用し此花桐の葉唐門

ち本堂の刻秘佛と浮年堂小は兄弟の縁等とて廟の

後よを以てと所と流しして竹二本毎年年生あるとなり

今も右紀行と流せり伍後唐門の一族の石塔とて

寺中より多くありて文保弘長正和等の年号ありて南河内庫理の  
後より大木ありて櫻也とありてより除く来つたなりと云々之傳あり  
和論語貴女部 満子曰人常より外のこころありて  
内のかゝるものなり 外のかゝるものなり 内のかゝるものなり  
内外各別なりと云々 内外一つありて  
佐友彦司の後家嗣信忠佐の母直十席清綱女之妻瀬妹ハ  
信忠より佐友彦司回籠ハ大木城と云傳て瀬塘厩涉あり  
其和之傳よりより古瓦の器ありもの多し

追加鵬城懐古

桂巻重穂積董誌

佐氏鵬城作古園漢陽樹艸亦能存  
須仰戰功忠義士子載雄名舜乾坤

古瓦より書きよきや鬼瓦

今南北有村邑謂中野興大笠生村山中  
有銀窟銅洞而古昔恢出世寶也其後窟  
山碎巖或癸或捨雖不成其功畧運變更  
今古不止季大笠生村銀窟之下有古館  
往昔伊達家之舊臣瀨上何某居之瀬壕  
歷然如昔日從者之子孫等住當邑矣白  
淡川者當邑之山中自謂涌水處流出矣  
此所亦謂鯉歸則觀音靈場瀧水也今移

于大福密寺之門前亦迴吾妻嵩陰崖而  
流出川有各謂松川也灑水磧礫屢成玉  
洌峭泐洋溢終出陽林矣流下至於沃又  
村而有一奇事也溶々水波忽沈底而為  
陸畛而絕流十余丁也到乎下而又漉潰  
浚々湍濑澆澗唯如鴻水不知斯處從是  
散在於爰村邑凡十八鄉也是屬信夫郡  
謂餘目之庄也七松明神白泊瀨社山王  
宮等在此間也

餘目庄十八鄉大凡

宮代 鎌田 本内 平田 沖中野 矢野目 飯坂

中野 大笹生 瀨上 九子 入江野 飯塚 高梨子

佐場野 并自 北沢 大谷地

右信夫郡之内ニテ餘目庄ト云也高ハ信夫之内ニ入ル也

越松川而西南有兩駅謂笹木野與度坂  
斯處從福隣米府逮羽品所々往行也攀  
乎坂有山邑謂李平也山中信夫與玉之  
有境也多鏡秘眼中于峯暫俯宴席熟臆



察於其风光者青龍起雲霧白虎吐熏風  
玄龜匍田圃矣其形勢雖畫於千筆以於  
万言賞之豈得能其景色乎饗宴數刻而  
初南面而座峻岩而靜心刮目原本山川  
屬事離辭連類遙覽觀於東南隅隈川紆  
曲渺々漣滄轉石瀨々不知其困底也

多ちんものあふ隈川の香のふれとやわらわらとて  
長月やいづくのふれとて隈川よやとる月かけ  
春の代も隈川の怪も氷の下小春とて花も  
花も隈川のふれもふれもふれもふれもふれも

行来も隈川のなるりやとていづれも  
その秋もとて長くやち代もともあふ隈川の流ぬ  
谷もわたりも隈川と流れもなる  
ぬも谷もわたりも隈川と流れもなる  
君の心もわたりも隈川と流れもなる  
あふ隈川もわたりも隈川と流れもなる  
年之箭手如何干淹垂逢隈之川水俱流而厥逝塵  
みふれもわたりも隈川と流れもなる  
隈川もわたりも隈川と流れもなる  
之れもわたりも隈川と流れもなる  
風もわたりも隈川と流れもなる

経重朝臣

有家

頸伸

小侍流

永録

為系

順酒院

幻雲子

家隆

経郷

後鳥羽院

明如... 孝子... 七色の香小神の入る

秋を... 鮫... 奥川

法橋維舟

當知川道五郡之大水小流皆俱滾水而  
至爰<sup>ウニ</sup>奮々而如湖水常橫篇舟渡此川昂  
呼爰謂信夫之渡利也亦西北臨於水涯  
有古館田椿館土俗傳曰岩城判官正氏  
居之矣中頃持地何某為再營而守柵今  
也雖石倒墨崩方壇歷然而隔於隈川相  
對與福城也山下在富主姬靈廟矣此所

儒官物部有文作之碑文季

淺... 何... 物... 人の世の中

欲趣圓山到岸濱  
朝霞淡々尚侵晨  
遙看河水深煙裏  
野渡喚人一笠身

洛陽大光山主當府之産日達

此川源白河西從甲子山流出至仙臺荒  
濱湊入海長流既及七郡皆以阿武隈為  
名也又從福津到仙臺水沃之流程凡二

百七十余里也舸艇數百艘常爲運送往  
返也其通舩也爲頂風揚帆式曳纜又峻崖  
而不及水主力處者榜人棹流サカネリ湍ツル水矣  
是信達西郡之賦稅米穀暨賈貨數品積  
之行江都覃諸國也斯水道昔年所レ有  
岩瀧所謂馬洗猿躍式銚瀧梁瀧等也又  
有淺瀨沙灘而舟舩難通路于爰有渡部  
氏友意者寬文中詔官廳達公聞蒙許  
客授卹如而爲穿鑿數千人夫爾足於西

岸而レ於辛力奇術也或令爲石工碎巖  
角又令下水練掘ウツマ沙石也黃金若干用レ經  
年月而成大功甚爲國益爾來於今津路  
更無斷絕也斯水邊於罔部邑有謂大壇  
是爲洪水成陵屯而使爲後世人矣其昔  
朱沢之功臣古川氏善長所設置之也其  
后大水每度尤有益享保八印秋八月十  
日者寬永十四以來雖爲鴻水邑民等登  
爰而避難道死者堪恍始知下賢者所監於

昏塾之妙計也東方過六里於山口邑有  
信夫文地摺之舊石也昔河原左大臣題  
歌之名跡也其外有所載代々撰集風雅  
如于貞季儂有石碑福嶋大守紀正虎君  
元禄九子年新建季而令為好人矣野梅  
開未落山櫻發欲燃名所之殘景亦不應  
哉亦於當邑有古館往古伊達家之麾下  
大波伊賀住于爰矣

又字摺石の傍に石碑あり大守堀伊達守棟は建ちて石  
七尺内地入るる大守幅或尺寸厚平拍を大守自序の如化石也

陸奥國信夫郡毛知須利石  
如稱其名不知何時其說亦  
未詳也只恐萬世之後人不  
知其斯石故表而立碑於石  
傍云

丙子元禄九年夏五月中旬福嶋大守紀正虎表季  
又字摺石の傍に石碑あり大守堀伊達守棟は建ちて石  
札所あり信夫守村分妙中より二十丁半あり  
虎々傍ありと云ふ所あり

落真大七念のぬ文字摺新ひよとては深に一亦たふたふ 河原奈臣

ともし一する多様の系の中流ふたのぬ文字摺切とてそな化 兼中納言 延彦

詠衣あき多つ少中流の流あは三月りもあはひ思ぬ文字摺 兼大信正 覚忠

靈哉文字摺 感興 盪吟 暘

獨想融公車 歌名 今古香

そくくしひーの詠と約ひきとくふくふも思ぬ文字摺 伊範

杖桑名境 福城東 慈閣 杉間 野徑 通

跡古 信夫 文字摺 苔生 石背 伏羲 中

久字摺もいへてきりてきりてきりてきりてきりて 花明

ゆー摺のぬれきりてきりてきりてきりてきりてきりて 傾技

かぶ衣流のいへては成秋ふかーはは神と思ぬ文字摺 観向

さ思ふ不釋りいへてあはなまていへて思ふ文字摺 隆信

名居やのいへてふくくはくくもいへて 松雨

おはる思ひやいへて隆真の思ふ草一を摺るなり 中納言 鄭忠

隆真此思ぬ文字摺思つてきりていへて一記ゆききりて 業平

去る銘のいへていへていへていへていへていへていへて 舜徳法師

いへていへていへていへていへていへていへていへて 顯昭法師

乱を思ふ心もいへて思ふ心もいへて思ふ心もいへて 為宗

このいへていへていへていへていへていへていへていへて 清浦

秋風少思ふいへていへていへていへていへていへていへて 爲子

いへていへていへていへていへていへていへていへて 陽雲詩

いへていへていへていへていへていへていへていへて 法橋龍舟

蟬もねふものねほせまうそくち摺  
其草やうらみは秋をよめるゆき  
春のまふもちをそや石のよのゆき  
又字摺や細花をひの草乃花  
其草のやゆきを深きやまゆき

麦乃  
柳乃  
菊乃  
三宅  
等香

昔河原左府題歌石在信夫年歴多  
苔融塵埋文字摺過尋山口眼摩磋石

釈元謹

予苗とるの字をいひて伝更摺

芭蕉

又字摺の石の幅之る

桃隣

又字摺や旭も古記

素玉

隆興の志士の里に秋風又字摺をいひて  
多ゆきと

公朝

大隈川上寒水 白川関前秋月 行々古道名蹟

家々月窟煙叢

名郡餘千秋色 打石染金華箋 偏題花朝月夕

君自斗酒百篇

一水一石心事 千草萬木仙居 胡為厭東奥水

時々憶武昌奠

右三章 江都南溟先生作送東奥

まうていりて言ふ昔より歳せりやとよのぬ又字摺 薩品伊集院  
の草のよきともうりせ隆興の志士の又字摺 素玉 村長

恨透黃泉不將休聞名錄石幾春秋  
遊人縱有生公術使彼如何為點頭

右

仙林

鐵崖禪師作

文字拙小未及神志何の復乃西

信林

文字拙此裏をつる所こけの毛

尾加

多々物や、常の目と云の如し

瀬川

相並有月輪御所之各是何代何時有豪  
貴人而住於爰殘於号乎不知來由也又  
從爰南方上四十余丁而有小倉寺邑此  
曾<sup>ニ</sup>其慈愛心忽有靈應而得誅之平夷<sup>ニ</sup>於

東國而令天下安穩也斯時將軍歡喜不  
斜郎命使舟岡推僧正於富國撰靈地應  
造建大佛及佛像之趣也僧正兼命普尋  
近郡未見奇峯于爰當郡信夫之山中有  
靈木而每夜放光也以故村民等告之比  
丘到彼處見之實為奇異大樹矣郎拓佛  
工令彫刻季不日而大小尊像得為一千  
軀也僧正欣悅甚大則於所伐之大樹下  
而造立殿堂安置所成之千手薩埵并

千軀之佛四大天王等而令為永鎮護國  
家也殿宇經年雖異昔日奉尊逮數百大  
像於今歷然炳燦也具有緣由殘季

苗也 振身ふまに抄るひを

麦何

奉此大夏打も少りのひの書

馬光

外柳雪もあまぬ抄るひの抄

從福城巽阻三十四里之嶮路而有一邑  
謂川侯是小午庄而北一鄉之庶民僧舍  
縣也此處有春日明神社傳聞古昔山陰  
中納言東遊日勸請和州三笠山神社矣

春日四所大明神者東殿武雷神才二殿齊主才三殿

天津兒屋根命才四殿姬太神也貞觀元年十月九日始行祭

初宮をまの基程さし免や神を

馬耳

命もやあのもことろりて麻の葉

既白

爾來年々祭禮無怠慢也又近邑渾以絹  
機為產業其織出品類巧於綾而至於織  
穀者應飾豪貴之襟其細綸絹者輕羅  
一夜三西也無大無小晝夜各不止也或  
嫗婦之繰車音如雷聲鄉音又叙女之機杼  
音似冬風烈矣每月六度僧懸為商賣交



易者也所謂於三都有斯緇谷也又以紫  
深爲名譽隣國好之賞矣御裏有古館曰  
朝館也亦當郡於立子山村有古館曰北  
裏館也天正年中石橋氏何某居之矣又  
隣鄉於青木邑有神社鎮祭惠源左源義  
平之尊靈季傳謂納白幡及太刀武具等  
川後所より東北の名頭院と云寺は鶴足山下之人來  
高玉瑞彦寺未寺當時定山ハ相政夷之帝裁松有年大  
和尙ト云リ一當代と凡亦一世ノ境内ノ種々の没世  
長年大和尙臨來湯

山河大地顯此無大地山河隱此無春花與冬天雪非有  
非無無亦無此用山のいひ傳ふ亦茶屋の禪老之

大凡此六一之村邑者委於椽檣山舎田屋  
豐饒而富家並軒寬々矣東隣於相馬地  
南旁田村郡西向於安達郡恰如函中也  
雖伊達郡中小年庄三七之村民者言語  
人物等別有凡姿也其縣阜飯野笹館小  
峯秋等也

大波小國 涉代田 布川 手渡 糖田 小嶋  
飯坂 大綱木 小綱木 五十沢 鶴田 小神 羽田

松田飯野大久保立子山青木秋山篁館

高合凡三万千三百四十二石多斗九升余也

其外所々之神社佛閣舊館等恐繁而滋  
之矣其北一之村出產者絹綿紙煙草良  
材薪木畠穀等數品也從斯西涉大隈川  
有宿馭謂八丁目乎是奧羽之道路而貴  
賤止足之旅館也其家風不尋常而擔前  
采柱青席重蔭風扇酒帘シニ自似拓客矣每  
家有嫖女數十人紅粉翠黛粧貌謳歌舞  
蹈爭畫屏窈窕ウカシメ姚女カキヲシ搔琴瑟翻錦袖シニ於

妓藝聞者聳耳見者低瞬也可謂鄭風衛  
風旅客者停馬蹄農夫者怠耕耘矣誠有  
謂古嘉媼樂傾國矣斯馭南安達與信夫  
郡之境川乎北方阻關谷地藏丘等有若  
宮宿清水宿石名坂等也亦石名坂者文  
治年中右大將家東征之時佐藤庄司出  
張之處而詳載金膝乎也亦八丁目東西  
二館者伊達家舊臣清野氏篁之后有故  
伊達成實暫居之也

武曰西館ハ志を以て住シ後城能也志居シ後成實  
居城のヨシ 志館を清野傳系居城のヨシ

八丁目町天の根館志を以て町長十二丁十五丁家敷二百五十町を  
事段曰文治五年八月恭愍の帝流伝史の佐藤左衛門の叙天  
河初右衛門高経伊加良目の七帝高重と川具して石名坂北  
の陳を先づこころ陳所の系ハ大坂を以てせあふ隈川の  
相成せき入るる事と川石名とて付ののじふと  
相成りりいふ事ハ常陸入道念西うる小常陸冠者為宗  
同次郎為重同高次郎綱同高次郎為家ハ中野人といふ  
伊達那 沃系の名小林の内よりみお先係とて大北  
流藩夫と射う多あり 佐藤左衛門以下の者を以てとて  
何先係といふ事ハ立一と一度小とておめひてわけおて

命と歴蘇よりし候くして志能成ひるる為重  
資綱為家三人とも初系病と多ありて進みぬ先為宗  
是とんあらしちりとも未練の元名なく事な換えぬ  
十文字小いさあもつて責りる後不佐藤左衛門以下ひひの  
兵十八人一所小家で付志能成為宗兄弟をそととり  
ありり 山のくさしきいりり

私曰石ノ内伊加良目七帝と有い今の五十丁村ハ伊達那  
沃系の道よりと有い今伝史郡西山下佐系村ハ石名坂の  
陳の系ハ大坂と有い也在隈川の由と有い事ハ  
今の永井川ハ是ハなまき川とて大隈川ハ一  
族人泪落石名坂 蜀魄聲々欲断魂  
故國遠辭知幾載 愁来歩々不堪聞

東於阿武隈川之澹中有崑嶼名謂村上  
也<sup>嶼</sup>崑碑礧々於爰臨<sup>三</sup>坻延筵卜座<sup>七</sup>睽<sup>七</sup>  
矚<sup>ケルスレ</sup>之者青松浸枝藤葛洗花嶮巖帶苔<sup>キヤウ</sup>橋  
木曝雪矣四時風景更無窮也傳聞可謂  
海中遊於僊界登於蓬萊瀛洲矣旋斯西  
岸有別風如異邦也於乎茲數代國守促  
駕黎民運步四衆尋來而賦詩題歌矣猗  
歟堪惜如斯風景遠於中國奇異巖隄陰  
於夷塵季

白浪紫烟起大隈中流罨石小蓬萊  
仙舟滌尽紅楓色棲鶴一枝折得來  
看<sup>ら</sup>た欠<sup>り</sup>多<sup>し</sup>折<sup>る</sup>蓬<sup>ら</sup>嶼<sup>の</sup>某<sup>乃</sup>也<sup>深</sup>紅<sup>系</sup>文<sup>珍</sup>  
五色瑞雲輿水隈怪松奇石出蓬萊  
天仙有跡瑠璃窟欲問神丹鶴未來

美秋の詠もろろこの海の岩根もろろ花の白波

蓬萊の下繪見せりり苔の花

又涉岩溪陽方十余町而有謂鮎瀧也春  
景尤夥歲每花杜鵑之頃者村民覃士庶  
隱人遊興於斯而酌酒爲詩詠歌惜斜日

十人有十景百人有百景之絕景也沙頭  
標<sup>カイヤキ</sup>於楊柳芝間枕怪石山上咲花月瀧汲  
鮎魚優游舞蹈無谷醉侶為之必迎星歸  
也凡隈川之邊於諸村水涯峽谷間有岩  
窟矣四壁者以石為累々其高十尺式一弓  
其廣及於尋常上蓋盤石其戸口僅而一尺  
一尺容易不可成人力處也如斯之空窟在  
處々季土俗呼此謂蝦夷矣<sup>イタリ</sup>訝億上代  
謂它居巢居之跡乎不知其所由亦自村

上之怪岩下流傳棧飛石行數十丁而

又金沢村内廿儿田阿弥院如來惠心御作而古佛也

有碧潭名謂大湍也斯處兩岸如合壁又  
似累印彎水時々作巴季雖早更不窺淵  
源之處也岸上有虛空藏大士之殿宇矣  
名山謂黒崖呼寺謂満願寺前有櫻樹枝  
條垂四隅十余間也其美景溢隣鄉未聞  
花客者待彌生而為群集終日忘歸矣

或云乃多々也

田母津 昌印老人

村々落落霧煙中月送歸鴉立晚風  
山寺疎鐘聲動處更添幽興思無窮

又

老樹白櫻補意閑市中自隔遠塵埃  
胸襟雪月在詩友花約芳盟到晚來

從是西下十余丁而有伏拜邑徃昔信夫  
鄉爲湖匯時自爰遙拜信夫山神社季呼  
諸徒爲村名傳於今也相次有永井河邑  
是福城南方鳥苑而假謂朱雀也此邑田

圃曠々而人家遠菖葶蓁々而原野廣以  
斯獵司兼鑿田湛水而如泥式若泓季四  
面山高如關雲路一拳千里自佇翻城鴻  
鴈往來於昏穉而休羽鵠鶴群尻夏冬而  
忘翔カケ白鷺ウイ啄水鳥アサリ鵲アサリ啾ウイ黃鸝ウイ轉ウイ棊紫燕  
噪軒鴛鴦雙翔戲波鳥鴨呼友咬岸萬鳥  
翀空嘲哢翩翩翻少無止時也獠者忽調玉  
藥放火撲鳥日以百筭也張綱四方纏蹇  
翺矣群會驚於爰既飛慮翳干時奇哉有

鳥因而喚於行式追於歸數里而誘之而  
 落故苑也往還於雲路式一日亦逮晝夜  
 是即鳥媒而能似為人語也物皆有所其  
 習也孰思之矣嘻盡之矣聖語其不聞之  
 及禽獸之聖德其不知之不獲已教之佃  
 漁之聖意其不察之哉鈞而不細矣解綱  
 三面之金章未降於爰痛哉悲哉又傳畔  
 有大平寺村此所有白菊兒之塚也傳聞  
 投死相易江鴨之海庭扇殘二首咏歌於

今在人口矣全傳兒之詩往々而傳焉

*鳥の因りて喚ぶるに似たりや人の語に  
 落ちて故苑也往還に雲路に一日も亦  
 晝夜を逮ふは鳥の媒にして人能く似  
 たりや聖の徳を其に不知き不獲し已  
 かに教むは禽獸の聖徳を其に不察し  
 かなんや魚の鮫に似たりや鮫の魚を  
 漁するに似たりや漁の聖意を其に不  
 察しかなんや*

懸崖嶮處捨生涯 十有餘霜有利那  
 苑實紅顏碎巖石 娥眉翠黛理塵沙  
 衣襟徒濕子行淚 扇子空留二首歌  
 相遇無談愁思切 暮鐘為孰促啼家

鎌倉建長寺夢窓國師法華自休藏司作

兒塚石碑

兒名白菊信夫郡茲之產自詠二首歌書  
 遺 扇子投死相易江鴨海今日兒淵

夢窓國師法身自伏藏司有悼兒詩矣

元祿九丙子年夏五月中旬立之福塢大守

此所記者乃在石之北也其地乃在石之北也

元祿九子祀福塢大守紀正虎君新美得  
留兒之名於後昆也自是西步塢行名于  
余丁而有大美城山久代伊達成實君之  
石門堅固堵墉旋圜曉表以立器流以  
軍馬旌旗翻臨雲戈戟雖凌山治亂得時  
無其迹松風葵黍平苑之矣傳於此間於  
後細此為白田塹形為田也雖然瘠野而歷  
々焉是處從石名坂至米澤之為郵路矣山  
腰民家百戶於今並檐而殿々焉往古以於  
爰為郡府也天正頃遷府於杉野目而後之  
謂福塢也寺院民屋皆俱移居既二百年采  
為兩郡府慶長年中上杉家領於爰之  
時者本在殿々是守福塢城郭而輝哉威  
於隣國也及戰切數向山宗祭於八幡寺在  
万年山長樂禪寺也東福竹籬有寶積禪  
寺於此院內有伊達晴宗御之靈廟而殘武



名於爰也既為人乎福馭而有泮流号須河  
每獲鮭魚騰於爰矣巧梁浸網捕也雖萬  
流涼水隈川而很於此河口而鱖魚聿無騰  
矣此河常有橋圮而通也絡繹行人交袖輻  
輳矣漸入於府內大道徑路允有八方各常  
如市也且謂夫榮隆矣負薪柴馱馬如蟻群  
集芻菜菓蕭夫如蜂集也者駟連鑿酒駕  
方軒般賑矣定市每月十二僧而兩郡迄四隣  
郎儕奔走於此數十里二百余里至也其儻  
無士無民無不通達要用也城腰縱橫之店舍  
予余斬連南北折於東西富家率閭閻賈擔酤  
關閤戶締繻暖風闌闌營寥天矣其言酬贖有  
眼前也將街中有小流矣一渠分而收晨澆潘水昏  
流指漣浪然矣夫高客常從三都及諸國來集  
十數人俟曉天建半夜僧糶糶調賣買為更  
易折互同聲耳每家置器也其賣品充數約綿及  
紅花米穀麥豆穉稔自富穀數品其外煙艸等也  
或積聚每又自產行日夕數百馱也為是脚力

往還年中更無絕也又爲賓客設興宴則  
六禽殊珍四膳異肴窮海之鱗甲迨以藻繡極  
陸之羽毛遠菌山穴饗寶鼎刺大何味重九沸  
和華糯肉盡於監酢醬釀醲甘辛也其器者  
棗玉杯盃盃金盤焉輝以秋橙酌以春梅矣盡  
善盡美茶器陶匏珍玩無缺也雖將富不吝者  
貧困而不諂一鄉各守矩矱過故知新敬神  
儒佛之風俗也往古當獻名杉野目矣于時  
有伽藍寺杉妻山也院中安置大悲毘盧遮  
那佛是即行基菩薩直力也尊容異靈而護  
鄕部金殿玉樓貝不可演之也殿前有橋名詔  
詔密焉今有城南處之祀是也中古東粵狼  
戾之時殿宇衰廢而失其舊記也天正辛  
中遷寺基爲中興改淨家爲以究竟一乘之  
名爾來靈佛之尊佛尊宗連綿年久雖然火  
非宗門之本尊故以寶永年中於信夫山之  
下園地再建於佛殿而安置所與古佛也夫六  
像之佛而備國民永久之鎮守也

ついでに... 招き... 招きの  
招きの... 招き... 招きの... 招きの...  
招きの... 招き... 招きの... 招きの...  
招きの... 招き... 招きの... 招きの...

又在福城鎮護社尊崇稻荷明神也鎮座歷年  
不知何代擁護當馭也靈應如水月宮殿赤珠石金  
額揭閉庭神垣益增光歲祀有祭禮而成儀  
歲重也斯時兩郡男女為群集新感情厚鄉食  
宴不少夫又往來揖問之貴賤常拱手敬老如  
爺也摩手頰愛雅好子也

正一位稻荷大明神奉納和歌發句等少々出之

奉納十首和歌

早春山々... 奉納... 政民  
月夜梅... 奉納... 利仁  
江春晴... 奉納... 利仁  
春夜花... 奉納... 利仁  
花散... 奉納... 利仁  
春夜... 奉納... 利仁



白はしんふにこころをいふ

志平

まのまの神農のむすぶこころ

麻風

かゝる川をわたりてこころをいふ

吹雪

奉るふすまのむすぶこころ

石段

こころの振舞はるる

石中

まのまのむすぶこころ

白鳳

後

稽ふまのむすぶこころ

吹雪

まのまのむすぶこころ

麻風

かゝる川をわたりて

志平

まのまのむすぶこころ

白鳳

まのまのむすぶこころ

白鳳

かゝる川をわたりて

連筆

冬

かゝる川をわたりて

麻風

まのまのむすぶこころ

志平

かゝる川をわたりて

連筆

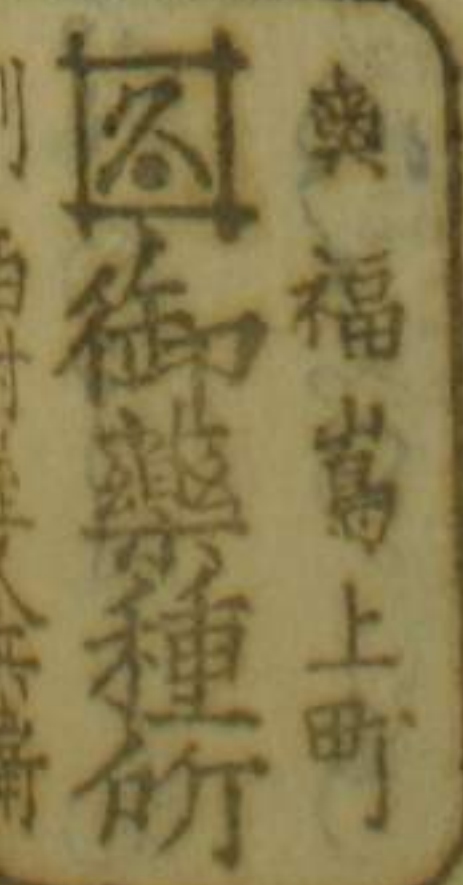
まのまのむすぶこころ

志平



屈指節而筭吾儕積臘星霜既四十有三忽驚焉  
命葉之危不耻俚啼不抱及法西郡之地理方角  
啓名所舊基人物產業等村老邑穉之以所  
傳聊誌其梗槩題名信達風土雜記伏乞  
後覽覽漆削者也于習元文二丁己仲冬  
下浣日於香風軒南窓下書

時習堂有隣識之



香風軒上談

香風軒上談  
卷一  
一





